

# 講習出席の所感

大塚喜一

本誌の編輯御擔當の先生から、講習の感想を書く様に、會場で原稿用紙を手渡されたので、求めらるゝまゝに書くことにする。斯かる原稿の要求は會場にて何人かの方方にせられてゐた様であり従て九月號の誌面には各人各様の所感所見等が百花繚亂の觀を呈する事と思ふので、小生はなるべく一般的な事よりも自分の特に感じた點及重要な事考ふる事に就き、腹藏なく述べさせて頂く事にする。

時日の順序上、講習の第一日の事から述べやう。この第一日が幼稚園令公布十周年記念講演のために提供せられ、その午前の四時間が意義深く思ひ出多き先覺功勞者諸賢の御講話を拜聽する事により有益多趣味に善用せられた事は、會員の一人として主催者側へ厚く感謝の意を表する次第である。その内容に就ての御所感等は多年斯道に御精勵

の先輩諸賢より拜承し得る事と思ふので、小生は只自分の是非云ひたかつた事だけをこの機會に述べやう。

それは山榭氏から「男が保母をしてもよいものだらうか云々」この話の出た事である。自分はそうした話の出る度毎に、我々の幼稚園創始の恩人フレーベル先生が男であつた事を、男女共に苟くも幼稚園に關係ある者はよく考へて見るべきだと思ふ。講習會期中に御目にかつた小生の舊知の或る保母さんが小生に「あの時、僕がやりました云はれたのではないか、私はあそこで大塚さんが一言訂正されやうとしたのではないか、少くもさうしたかつたであらう云々」云々眞面目に云はれたが、小生は決してそんな私事を云はむと欲する者ではない。只フレーベル先生が男であつた事は、たゞひ男であつてもその性情資質が幼

「兒童生活を俱にするに適してゐるならば幼稚園の實際に何等かの形態に於て參與し得る事を示してゐるのではあるまいか。フレーベル先生やベスタロッチー先生の如き世にも稀なる天才は實にあんなに子供を俱に遊び、こゝの出來た點に於ても測り知れざる深さを感じる譯であるが、現

在及び將來の幼兒教育界に於て斯かる偉人の精神を體現せむとする抱負を天分を有する者が、男性の中からも出てよい筈だし、幾分かでもそうした方向に伸び得る見込のある人を見出してその性情を涵養する事にお互に努力してこそ、先人の恩に報ゆる事にもならふと思ふ。小生の今日までの幼兒達との親交によつても明確に切實に感知された事は、幼兒殊に男兒は男の先生をその遊び相手に求めてゐる生活の實相であつて、成城幼稚園に於て幼兒の一組十三名を受持たせて頂いた時特に切實にこの感を深うしたのであつた。これは「幼兒の世界」の公事として「子供からの要求」として、こゝに聲を大にして天下に發表するの要がある。

尙山樹氏がベスタロッチー自筆の貴重なる資料を手に入れたる事實談は小生の特に感興を覺えし所、何卒斯

かる永遠の生命ある古典の生ける精神が斯道先覺諸賢により脈々として我等の内心に感應し來り、先人の教育精神が幾分にも我等に喚起育成せられむ事を切望する次第である。

x

扱て、こゝに筆を新にして、今回の講習に於て最も小生の期待せし「幼兒の性情の涵養」の御講話に就て述べやう。

倉橋先生が御病氣のため十一時間の豫定の御講義の後半の五時間を拜聽出来なかつた事は會員の誰しもが残念がつて居られた事と思ふが、自分はこゝで、六時間承り得たこゝによつても大いに啓發さるゝ所があり、それだけでも東京まで來た價値は充分あつた事を感謝すると共に、後を承り得なかつた事を、お話の内容から特に惜しまれる所以を述べて、聽講者全員を一心にして是非この續講をお願せねばならぬのである。(申上げる迄もなく講師始め主催者側に於てそのおつもりに違ひないと思ふ者ではあるが、尙念の爲め)

そのお話の内容はこゝを云ふのか、幸この稿は今回の

御講話の全文の速記が載せられた後に附加して頂ける筈に承つたので、あの御話を聴かれた方と話してゐるつもりで直にその内容に立入つて書いて行くことにする。

七月二十四日の『涵養いふこ』のお話を進めて來られて「養ふこいふ以上、元來子供が持つてゐる善良なる性情を養ひ育てるこいふ事にさうしてもなる」こいろく話して來られて複雑になつて來た話の筋をわかり易くする爲に「先に結論を申しませうとて草花等を育てる比喩にて説明せられ

(一)水をやる場合

(二)こやしをやる場合

に分けて、私は先づ幼稚園に於て(一)の態度の大切な事を説く。先づその方を大いに力説するが決してこれだけでない(二)の方もある事を含んでゐてほしい。云々

こ云はれたので、(二)の方を大いに期待してゐたのである。今迄先生の御話や書物等によつて我々が學び得たのは主に自由・自然・淡純いふ方面が鮮明に印象せられ幼児教育の特色として先生も多年力説し來られたのであつた。

そこを、學ぶものゝ考への足りなさから或は先生の御説が(一)に偏してゐる様に誤解する人もあるのであらうか、先生は(二)の方も忘れてならない事を特に心をこめて我々に教へて下さる御心もちが、誘導保育案のお話や今回のお話の終りの方にもうかゞへるこ思ふのである。(二)の大切な事もこよりであるが、幼児教育の特質上、教育者の過ぎたるむしろ見當違ひの熱心がこの特質を破る弊が多分にありこの間の調和如何こいふ最も苦心を要する所を甚だ輕視してやたらに子供に迷惑な誤親切をする人が多い一般の形勢に鑑みられ、先生も先づ(一)を強調する事を餘義なくせられたのであらう。多年、斯界の啓蒙に盡力し來られたる先生には、大切な(二)に入るまでに必要な基本教育の特質に合する保育態度が保母その人に體得されて來るここの遅々たる事を實にもさかしく思つてゐられる事こ恐れながら拜察する者である。今回のお話の中にも「幼児教育に關係する人は幼児の自然を充分に尊重してゐられるに相違ないこ思ふから、その上で倫理主義的の善良なる性情の事をさう考へるかゞ問題こなる」。こ一段のお話の結びに

ハッキリ云はれたのを聽いて、この尊重のまだく足り  
ない自分を顧みて實に冷汗を流す思ひがしたのである。

數年前にやはり「幼兒の性情の涵養」をいふ題でいこも情  
味潤澤なるお話を承つた際に

「幼兒が本來有する基本的性情としてのほがらかさ、す  
なほさ、いたしみ、うれしみが自然に潤澤に涵養されて  
居ればこそ、人的物的環境による善美聖への指向が幼兒  
のそのすなほな淡純な心情に浸潤して行くのである、云

々」

と、當時の前段と後段とのお話のつながりをつけられた大  
の主旨を記憶してゐるが、こゝが丁度今回のお話の(1)よ  
り(2)への關係に相應して來るのであると思はれる。

再び比喩的に云へば、水をやつて自然の健全なる生長力  
を充分に養ふておけばそこへやつた肥料がその生長力によ  
つてその花の眞の美しさを輝かしむる様になつて來るので  
あらう。だから、(1)をよく理解してからでなければ(2)  
へ入れないのであつて、その(2)へ話が移らふとする境目  
の邊まで行つたところで今回の講話が中斷されたのである

から、まことに惜みても餘りある事と思ふのである。今回  
承り得た範圍内の終りの方で

「私達が如何なる善良なる環境により幼兒を保育せんこ  
するにせよ、その時の目標はそれによつて幼兒の性情に  
浸み込ませざる爲である。例へば善良性の織り込まれて  
るお話をする際にも、たとゝ感服させるだけでなく、幼兒  
の心に浸み込み得る様に話の材料及態度を工夫研究する  
必要がある」。

と云はれた、その詳細な具體的な實相を聽きたかつたので  
ある。善良性の含まれてゐる環境を以て涵養するといふ  
(2)の方が極めて大切な事でありながら、その方法態度に  
幼兒に適合し難き弊に實際に於て知らず識らずの中に、つい  
陥り易きものがあり、甚しきに至つてはそうする事を自己  
の天職の尊嚴に於て墨守し益々之に努めてゐる人さへある  
が爲に、幼稚園らしくない光景を現出してゐながらその不  
自然に心づかざるのみか、斯くては彼の目的をさせる善良な  
る性情の涵養さへもその眞實の効果を顯はし得ざるこゝ、  
實に遺憾なる見當違ひの努力をいふべきである。殊に宗教

教育を以てその第一義の使命とせざる各幼稚園に於てはこの點に深く思を致すべき微妙にして切實なる實際問題が伏在すると思ふのである。今はこの稿の性質上それに就ての卑見を述ぶる暇はないが、とにかく宗教道徳藝術等の價值への指向に於て我等の態度を誤ならしめ、單なる教育者本位の熱心以上に、幼兒の神性に忠なる僕として先づ己を卑うして幼兒と俱に學ばむとする態度に立歸り、此間の關係を新しく見直して行かねばならぬであらう。斯く考へ來つた時、今回の後の方のお話を熱心なる保姆諸彦に是非聽いて欲しかつた思ひが愈々切ならざるを得ない。誰もあれ

で濟んだは(勿論内容に於て)思つてゐなかつたであらうが、あの後のお話の聽けなかつた事を、以上述べ來つた様な内容からの必然性に於て鮮明に認識し切實に惜み求めてゐる方が何人あつたであらうか。もこより今回の缺講は全く止むを得ざる支障によるものであるから主催者側の御心配ミ臨機應變の處置ミに就ては充分の謝意を表するものであり人的關係に於ては一言の不足を云ふ氣持も無いのである。

只お話の内容からあの續きを聽けなかつた事を惜まれるのは、幼兒教育の眞理性より發する本念であり、その當然の要請は、小生一人の提言を超越せる公道である事を諸賢ミ俱に明確に認識せねばならぬと惟ふのである。

受講印象新なる間に思ひ、七月二十八日歸洛のツバメ號車中より案を練り、漸くこゝまで書きまゐめた次第である。倉橋先生のお話の中には、尙他にも深き印象を残した點が澤山にあつた。殊に、「本當の生しほり、こは、こゝろいふのを二十年倉の中に入れて置いたら一流の葡萄酒になるものなのだ」云はれた點等は、如何に眞の教育には時が大切であるか、自然の生長に信頼して任せつゝ教育者としての著實なる心づかひを長き年月に亘つて不急不怠に續けてゐるこゝが必要であるか等々筆に表し難き感慨に思はず目頭が熱くなつた。又、習慣ミ性情ミを比較して、性情の涵養は自分ミいふ事を離れては出来ぬ云はれた點、涵養は内からうるほふす意を表す語であるから養成ミいふ語の表し難きしつゝ、こゝろミ浸み込んで行く意を含んでゐる點等は、保育の特色の微妙さを感じるこゝ共に、兼てより「保姆養成」

なる語に飽き足りなく思つてゐた小生には「保育精神涵養の眞義」なる語を用ひて漸く落つき得た心地の中味を恵まれて實に愉悅の情湧然たるを覺えた。保姆たり又たらむとする人の生活の中に今回のお話の斯かる中味が浸み込み融け合つて行くことによりてこそ幼児の性情の涵養も自然に行はれ多様になることと思はれる。吾人は特に保姆養成に

## 感想

七月二十一日の朝いよく今日から講習も、何さなく張りきつた様な心地で、女高師の門に入るに、トランクを重そうに下げた地方の方、顔見知りの東京の方等が、同じ様に希望にみちたお姿でぞろぞろと参らつしやる。六〇〇人を越へた會員の事で、さすがの大講堂も後までぎつしり、何さいふ盛會ぞぞ我事の様に嬉しくなりました。同じ務を持つ地方の方々、永い間汽車にゆられ、汽船にゆられてようこそ奮發して來て下さいました、さお一人一人に申上

従事する諸賢も俱に此間の眞實相を三省深慮する要あるを惟ふ者である。

尙他に述べべき事も多くあるが、これで頂いた原稿用紙は一枚も無駄にせず全部書きつくしたので、一まつ筆を擱くことにする。

(昭和一〇、七、三一、堺の郷里宅にて)

徳 久 孝

げたい様な心地がします。六月の幼児教育で講習の記事を拜見した時に、文部省主催でなくて協會主催では、人數の制限や手續の面倒がないので、きつみ大勢いらつしやるにちがひない見越をつけて、早速申込みをした甲斐あつて私はいの一番、窓ぎわの涼しいお席。此處で居眠りをして、遅刻をしては一番の番號に對しても申わけないに、講習中は全てを犠牲にして早寝をしたさいふわけです。

第一日は幼稚園令發布十周年記念講演會が午前中行は